



TITLE:

<批評・紹介>森鹿三著「東洋學研究:居延漢簡篇」

AUTHOR(S):

尾形, 勇

CITATION:

尾形, 勇. <批評・紹介>森鹿三著「東洋學研究:居延漢簡篇」. 東洋史研究 1976, 35(1): 109-113

ISSUE DATE:

1976-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153610>

RIGHT:

批評・紹介

東洋學研究——居延漢簡篇——

森 鹿三著（森博士論文編集委員會編）

昭和五十年三月 同朋舎 東洋史研究
叢刊之二十三之二 A5判 三八四頁

ここに居延漢簡というのは、一九三〇年、スウェン・ヘディン氏のひきいる西北科學考察團……が中國の西北邊疆エチナ河下流域カラホト近傍で發掘した一萬點に上る漢代の木札文書のことである。この古文書が漢代の政治・軍事・經濟・社會・文化を開（解）明する上での有力な基本史料であることはいうまでもないが、これを學會共有の財産にするまでには相當の紆餘曲折があった。

いささかでも「居延漢簡」研究に手を染めた者であれば、右に引用した一文には一種のなつかしさを覚えるにちがいない。これは、かつての本誌『東洋史研究』の居延漢簡特集號（十三の三號、昭和二十八年）の巻頭を飾った森鹿三氏の「居延漢簡研究序説」の冒頭の一節であり、この一句こそは、我國の居延漢簡研究の事實上の幕開けをつける宣言であつたと言つて言い過ぎではない。

本書は、森鹿三氏の歸家を記念して公刊された論文集、すなわち「歴史地理篇」につぐ第二の論文集であり、副題の示すように居延漢簡研究を中心とする氏の永年の業績が集大成されている。

本書の一つの特色は、これが、森氏のもとで研鑽を積まれた「居延漢簡研究グループ」系の諸氏による苦心の編纂に成るもの、つまり他撰の性格のものであるということである。右の編纂の際の基本的方針は、色々の機會に發表されてきた森氏の居延簡についての成果を、原則として發表年次に従つて、しかも發表當時の原型を保ちつつ排列することであり、その意圖とは、本書の「後記」（米田賢次郎氏所記）にて「先生の各論文はその時その時における漢簡研究法のスタンダードを示すものであり、また全體として通讀する時は、そのまま日本の木簡研究史を構成しており、初期の不利な條件下で、研究者が如何に雕骨の勞をいとわず手さぐりの状態で、一步一步研究を進めて行つたかを知ってもらふ事が、先生の研究の眞價を知り、また讀者の研究にも益する所が多いと信じたがためである」と述べられるものである。

いま本書を通覽するとき、右の編纂の意圖は充分に達成されていると認められ、従つてまた、本書が單なる論文集に留まらない意義多きものとなつてゐることも、この編集方針に負う面が大きいと思われる。

二

前述したように、本書は居延簡を中心とする簡牘史料の研究が主要部をなすが、漢代以降の紙本文書に關する諸成果、さらには『文館詞林』等についての書誌學的考察も併せ收録されている。こうい

った構成は、著者の多岐多彩な活躍を跡付けるという編者の立場に基くものではあるが、一見した讀者をやや眩惑させる一面があることも否めない。しかしながら、複雑な経緯をたどった末に利用に供され、しかも現今に至っても未だ不分明な點が多い「居延漢簡」とは、まさに書誌學的對象でもあり得たわけであり、従つて、本書の右の如き構成が、木簡研究の際の著者の有力にして獨特の武器は何であつたか——ということを示唆するためのものであつたと考えれば、これまた編者の方針は妥當なものであつたと理解し得る。少くとも評者にとっては、著者における木簡研究と書誌學との不離の關係が、本書を通讀して初めて得られた發見であつた。

さて、本書の主要部たる簡牘についての諸論は、緻密なる研究考證の諸成果と、啓蒙ないしは入門を目的とする諸篇（居延漢簡研究序説、「長沙出土の竹簡」、「居延出土の木簡」、「漢晉の木簡」、「漢簡四題」のうち第一・三・四篇）とに大別し得る。後者は、内容的には相互に重複する部分も多いが、ともかくも各篇とも、評者などの入門者にとっては、格好の、そして必讀の價值を今なお失なわないものであると思われる。ただしこれらはここに改めて要約すべき性格のものでもないで、以下、前者について、その要旨を紹介し、あわせて著者の苦心の作業過程を辿つてみようと思う。

まず「令史弘に關する文書」は、勞幹氏の『考釋』のみが頼りであるという制約のもとで書かれた記念すべき一篇であり、「關帝夫王光」（本書「漢簡四篇」の第二篇）に續いて、より本格的に、同一人名を手懸りに諸簡を通檢・整理するという、當時としては畫期的な方法を提示したものである。この結果、甲渠候官令史の范弘という人物が浮上してきたのみならず、十數名の人物の活躍が年代と

ともに附隨して發掘され得たのであり、このように整理法の有効性と適格性を具體的に示したということにおいて、後人に與えた影響は大きい。この論文が同一人物を媒介したものであるのに對し、一つの事物をとりあげて記録の整理をしたのが「居延簡に見る馬について」である。ここでは、傳車・傳馬・驛騎の制度、また吏馬馳行の制、さらに漢代馬の形質等々について、從來の文獻資料には望み得ない生々した實態が紹介され、居延簡の寶庫たることを如實に世に知らしめた一篇となつてゐる。つぎに「居延出土の一冊書について」は、居延簡に含まれてゐる二つの冊書のうち、三簡をもつて編まれている「令史充」に關するものの考證であり、馬衡氏の遺稿の公表によつて初めて知り得たその表面の釋文を手懸りに、これが甲渠候長の鄭赦の寧（喪暇）に關るものであることなどを解明し、さらにこれに直接間接に關連してゐる殘簡を集成し、當時の取寧の實情を紹介したものである。まさに居延簡研究の醍醐味を著者とともに樂しむことができる好論である。

周知の如く居延簡は斷簡零墨の集積體であり、これを何らかの方法によつて整理し、可能なかぎりつなぎ合せて原型の復原を試みるということは、その研究者に課せられた第一次的な、そして魅力的な作業であつた。「居延漢簡の集成——とくに第二亭食簿について——」は、その作業の一環として、副題のとおり「第二亭」の食簿を中心とする諸文書を集成したものである。ここで整理された諸木簡は、武帝末期から昭帝初期という比較的早期の年代に位置づけられるものであつたが、「居延の早期簡」は、前掲論文の成果を踏まえたものであり、有紀年簡の集成から逆に「第二亭」に關る木簡群に迫り、さきの年代比定を確認するに至つたものである。なおこの

論文末には「ちょうどここまで書いたところへ……『居延漢簡甲編』がもたらされて来た」（一一八頁）という居延簡研究史上の重要なエピソードが記されており、こうした類の敘述が散見されることも本書の魅力の一つである。

「居延出土の卒家屬廩名簿について」は、戌卒の家族に對する穀物の配給に關する居延文書の研究であり、配給量が性別と年齢別によつて四段階の差異のあつたことなどを解明したものである。ここでとくに、未使男（女）、大男（女）の年齢區分がそれぞれ七歳・十四歳にあつたという指摘は、一般賦稅制度をめぐる文獻史料を實態から補足するものであり、見おとすことはできない。

『甲編』のもたらした驚きの一つは、大部分の各簡の出土地が明記されていることであつた。いかなる根據にもとづいてそのような出土地の比定が可能であつたかについては、當時においても（本書「漢簡四題」四參照）、また今もつてよくわからぬ點が残されているのであるが、ともかくもこの新しい土臺の上にいち早く立つて、創意に滿ちた方法論をもつて居延簡研究の新しい方向を指示したのが「居延漢簡とくにウラン・ドルベルジン出土簡について」であつた。すなわち、著者は『甲編』において「地灣」（ウラン・ドルベルジン）出土と記されている諸簡のその上番號（函號・梱包番號）に着目し、ついで接合簡・封檢・簿檢等を勘案しつつ、地灣出土簡グループを慎重に選定し、地灣が肩水候官の遺址であり、また大灣（クラリンギン・ドルベルジン）は肩水都尉府の治所址であるという結論を導き、從來の懸案の一つを見事に解決したものである。なお細かいことではあるが、名籍類に見える「黑色」について著者は明快に「皮膚の色」と斷じておられるが、最近でも張春樹・

陳槃氏らの論考もあるようであり（本書末尾附載「簡牘研究文獻目錄」參照）、問題がこれで無くなったわけではない。さらに餘計なことではあるが、評者には、とくにこの論文に啓發されつつ、大灣出土簡の整理を試みた思い出がある。

「敦煌・居延出土の漢曆について」は、敦煌簡中所見の漢曆についてのシャヴァンヌ・羅振玉氏らの成果を繼いで、居延簡より見出される曆簡數點について考證を加えたものである。すなわち、大庭脩氏の詔書簡についての研究を合せつつ、丞相に下された詔書が居延戰線に達するには五十七日を要したことなどを明らかにし、また元康五年（神爵元年）の閏月については『三正綜覽』等は改訂を要すること——という重要にして興味ある副産物を獲得しており、發表當時も話題となつたものである。つぎに「居延出土の王莽簡」は、二十九の有紀年簡とそれらの上番號を手懸りに、四十餘簡を新たに王莽時代のものと比定した考察である。この比定の際、指標として利用し得ると當然豫想されるのは、周知の王莽期特有の官名・地名であるが、木簡の總合的調査活動に基いて、史書より直接承知されているもの以外の特有の名詞・數詞、すなわち「祿・斛・■・黍」などを新たな指標として判定し、これらを年代比定のために援用していることが本論の特色であり、ここにも餘人の追隨を許さぬ著者の燭眼が認められるのである。また本論で折にふれて何氣無く指摘されている諸點、たとえば「戊」日の尊重、『呂氏春秋』の應用等々は、王莽政權の理解のうえで、新史料を提供したものと見て看過し得ないものがある。

三

主要部について配列されている「西域出土の書蹟」、「樓蘭出土李柏文書について」、「李柏文書の出土地」——の三篇は、大谷探險隊（直接には橘瑞超氏）の発見にかかる「李柏文書」を中心とする樓蘭地方出土の紙本書類の解題であり、とくに李柏文書の出土地に關して、従来の諸説を整理したうえで、これが樓蘭故城址とは別の地點、すなわち當時海頭と稱された故城址（スタインのLK）であつたのであらうとする新見解には、著者の冷靜な眼を感知し得る。發現文書に關する著者の興味は止るところを知らないようであり、「パスパ字の文書」は、G・ツツチ氏發見の懷寧王海山（元の武宗）の令旨の解説である。

「所在未詳の文館詞林」、及び「文館詞林三題」としてまとめられている三篇は、いずれも題記のとおり、我が國の貴重な財産たる『文館詞林』（弘仁寫本）についての詳細な書誌學的考察であり、とくに前者は、幕末の小林辰の「目錄」の限界を指摘したものである。ちなみにこの成果は、最近の阿部隆一氏による完備した『詞林』解題（『影弘仁本文館詞林』古典研究會）でも評價されている。

「懷堂日歴に見ゆる費川桃年の事ども・同補遺」と「懷堂日歴に見ゆる經籍」の二篇は、『文館詞林』とも關する松崎懷堂の日記をめぐる考察であり、まず前者では『史記放異』で知られる大島費川父子の事跡を『日歴』より辿り、後者では、『日歴』所記の諸々の經籍を抽出し、これらを森立之の『經籍訪古志』の順序に従つて排列して相互に照合し、各書、各版本について書誌學的解説を加えている。本書においてこの二篇のみは戰前（昭和十五年）の著作であつ

て、いずれも、戰後における居延簡研究という開花を支えた土壌を示唆するものとして、興味深いものがある。

前記『經籍訪古志』でも紹介され、『日歴』にてもしばしば話題となつてゐる米澤藩上杉家所傳の未版三史などの貴重書については、多くを述べる必要はないが、本書の最後に收録されている「米澤藩學とその圖書の歴史」は、右の善本類がいかなる經緯と背景のもとに所藏されるに至つたかということについて、藩學の性格、諸儒・諸學派の活躍などの多方面から、詳細にかつ啓蒙的に解説したものである。なお、稿中に明快な形にて轉載されている『官庫御書目錄』と『御書籍目錄』とは、米澤本の全貌を一目瞭然たらしめるものであり、便利である。

四

著者森鹿三氏が、とりわけ居延漢簡の研究のうえで、一貫して指導的役割を果されてきたことについては、もはや饒舌を要しまい。少くとも、これまでに些か紹介してきたことからも明らかなように、沈着精密なる著者の諸成果は、ことごとく先驅的であり模範的であつた。現今の盛況と言つてよい居延漢簡研究の到達點から顧みれば、本書の個々の考證にはあるいは補訂を要する面があるとも言える。しかし、著者の永い研究の道程そのものの價值が、このようなことから減殺されるものではないことは言うまでもないのであり、たとえば江陵鳳凰山前漢墓發現の簡牘群等、中國から出土資料の報告が陸續として寄せられ、これらの解明が新たな課題となりつつある折から、著者の確立された木簡研究の原點を充分に反芻しておくことが、これまでに必要になつてくると豫想される。こうした

意味においても、本書の刊行は、まさに時宜を得た、そして契機的なものであると言ひ得てくるのである。

さらに右のことにちなんで言えば、本書に附載されている「森鹿三先生と木簡研究」（大庭脩氏記）は、先驅者に必然的に荷せられる苦闘の道程を肉薄的に敘述したものであって、一讀の價值がある。敢て蛇足を加えれば、以上のこの批評が、平板なものに終止してしまつた事由も、この大庭氏の周到な一篇の存在に依るのかも知れぬ。

最後に、居延簡研究の驥尾に付した者の一人として、著者の功業に敬意を表し、本書の上梓を慶賀しつつ、筆を擱く。（尾形 勇）

清代重要職官の研究

楢木野 宣 著

昭和五十年三月 東京 風間書房 A5判
本文及び清代重要職官在職者通檢共六五二頁

本書の著者楢木野宣氏は群馬大學に在職せられ、長らく清代官制に關する研究を行つてこられたが、その研究成果を本書にまとめられた。本書のあとがきによれば、氏は本書に收められている「清代重要職官に關する基礎的研究」と、その附篇である「清代綠旗兵制の研究」を、東京教育大學に博士論文として提出され、文學博士の學位を授與されたとあるが、誠に本書こそ氏の精魂をこめられた貴

重な勞作であるといえよう。吾々が本書を通讀すれば、氏の並々ならぬ研究の跡が隨所にみられ、吾々後學に幾多の示唆を與える好著となつてゐる。筆者のごとき淺學の徒が、本書を書評することは、誠に僭越の極みであるが、氏と同様な問題關心を有する者として、ここに拙筆をも省みず、いささかの所見を披瀝するものである。

さて本書は本篇・附篇からなつてゐるが、氏のあとがきによれば、氏は最初清代綠旗兵制の研究に従ひ、のち問題の關心が滿漢任用の多寡の比較研究に移つたとある。氏はこれまでこれらに關する數々の研究論文を各誌に公表されてきたのであるが、本書を公表するに際して、今迄の研究の不備な點に補正を加えられ、現段階における氏の研究成果を網羅された。ここでまず本書の構成に従ひ、最初に本篇の論點を整理しておこう。

序章 清代重要職官研究の課題

第一章 重要職官滿漢比較上の諸問題

第二章 重要職官滿漢比較の要領

第三章 總督滿漢比率の變動

第四章 巡撫滿漢比率の變動

第五章 大學士滿漢比率の變動

第六章 軍機大臣滿漢比率の變動

第七章 部院大臣滿漢比率の變動

第八章 滿漢比率の變動と滿洲政權の消長

結章 清代重要職官の特色

序章で氏は、清代の重要職官について、それぞれの沿革・設置・組織・職掌・意義等について究明することと、同時にこれらの重要職官についての滿漢任用の多寡を比較研究することが、滿洲政權の